

山本周五郎「樅ノ木は残った」論

— その戦後性をめぐり —

富 崎 華 奈 子

「政治と一般庶民とのつながりは、征服者と被征服者との関係から離れることはできない。政治は必ず庶民を使役し、庶民から奪い、庶民に強要する。いかなる時代、いかなる国、いかなる人物によっても、政治はつねにそういつたものである⁽¹⁾」というように、山本周五郎は常に、政治と庶民というものを対立させ、庶民を苦しめる政治というものを「悪」として捉え、描いてきたように思う。

この作品では幕府という巨大な組織に独り立ち向かう原田甲斐の姿を描いている。甲斐は伊達藩の家臣という立場であり、権力の側にいる。しかし、甲斐はそこからもっと強大な権力、幕府に立ち向かった。甲斐は立場的には権力の側にありながら、それまで絶対であった幕府という「権力」に耐えることで抗う彼の姿は、決して前面に出てはいないが、幕府という「権力」に抵抗しているのではないだろうか。そして、ここには「政治」「権力」イコール「悪」

という構図が見られる。『加羅仙台萩』以来、『伊達騒動実録』をはじめとして、『仙台萩の真相』など安芸忠臣説、甲斐忠臣説など立場は様々であるが、伊達騒動については勸善懲惡という構図をとってきたといえる。この作品においても例外ではない。真相がわからない伊達騒動という題材において、作者はそれまで悪とされた原田甲斐のかわりに、巨大な組織、幕府の代表として下馬將軍酒井忠清を伊達騒動の黒幕にした。それに、私利に眼がくらみ、幕府に利用された伊達兵部、お家のため、という「御為倒⁽²⁾」と我執にとらわれがちな仙台人のお国柄がこの騒動に結実していると考えた。「政治」という「悪」対、それにもあそばねながらも耐えて、志を遂げようとする甲斐という構図をとっている。この点においてこの作品も御家騒動のひとつのステレオタイプを踏襲しているといえるのではないだろうか。ただ、『伊達騒動実録』をはじめとする

甲斐逆臣説を主張しているもの多くが逆臣原田甲斐の死、甲斐の一族男子の罪死というかたちで「悪」を糾弾しているのに対し、この作品においてはそれに翻弄される人間のむなしさや、あさましさは伝わってくるものの、「悪」とされた政治を糾弾するには至っていないといえるのではないだろうか。

そして、この作品が執筆された昭和二十年代から三十年代にかけての時代というものが、この作品のそうした構図に大きく影響していると思う。

戦時中、国家権力は絶対的な強さで国民の運命を左右した。

『縦ノ木』の書かれたのは、それが音をたてて崩れた後であり、かつ、占領軍という新しい権威の前で、日本政府も民衆も右往左往していたときだった。^③

この作品が書かれたのは、権力が絶対的な座からすべり下り、それが変革可能なものであるという新たな認識を民衆が持ち始めた時代だったと考えられるのではないだろうか。それは又、「敗戦」という現実の中で民衆が権力に対する不信感、不満感というものを抱き始めた時代だったと言うことができるのではないだろうか。

つまり、甲斐がそうであったように、政治という「権力」を悪として捉えたところにこの作品の戦後性があると思えると思う。

原田甲斐は決して名をなそうとはしていない。しかし、名を拒み

ながら、自分の置かれた状況下で耐え忍ぶ甲斐の姿は作者がそう望まなかったにしろ、美談としてわたしたちの眼に映る。犬死になるであろうことを知りながら、鬼役を願ひ出た塩沢丹三郎に對した、甲斐の心情を作者は次のように描く。

丹三郎は「自分の死は御役に立つであろう」と云った。主人のために生命を惜しまないのは侍の本分であるが、誰でも容易に実践できることではない。甲斐は丹三郎を知っている、彼の性質としてそういうことを口に出して云う以上、そのときが来れば死を恐れぬだろう、ということもわかっていた。

国のために、藩のため主人のため、また愛するもののために、自らすすんで死ぬということは、侍の道徳としてだけつくられたものではなく、人間感情のもっとも純粹な燃焼の一つとして存在して来たし、今後も存在するだろう。―だがおれは好まない、甲斐はそつと頭を振った。

たとえそれに意味があつたとしても、できることなら「死」は避けるほうがいい。そういう死には犠牲の壮烈と美しさがあるかもしれないが、それでもなお、生きぬいてゆくことには、はるかに及ばないだろう。

作中の甲斐は「壮烈」な「死」というものに対して、好ましくないという思いを抱いている。

―意地や面目を立てとおすことはいさましい、人の目にも壮烈にみえるだろう、しかし、侍の本分というものは堪忍や辛抱のなかにある、生きられる限り生きて御奉公することだ、これは侍に限らない、およそ人間の生きかたとはそういうものだ、いつの世でも、しんじつ国家を護立てているのは、こういう堪忍や辛抱、一人の眼にもつかず名もあらわれないうところに働いている力なのだ

しかし、甲斐の「壮烈」の否定は当時の社会にあつては、そぐわないものだったのではないだろうか。当時の「意地」や「面目」をもっとも重んじたであろう社会、殉死などというものが行われていた社会において、それは認められるものだったのだろうか。また、作者はここで「侍の本分」の問題を「およそ侍に限らない、およそ人間の生きかた」という普遍的な問題にしている。このことに関連して、作者は「―現在、生活している最大多数の人たちに訴えて、ともに共感をよびたい、というテーマが見つかつたからこそ小説を書く」のだと言ひ、「その小説から、読者の共感をよびおこすことができた、とするならば、それはまさしく現代小説であつて、背景になつている時代の新旧は、問うところではない、」と言つてゐる。つまり、作者はここにひとつの主題をおこつたのではないだろうか。その時代の思想や、慣習を無視してまでも伝えたやうと

したこと、読者の共感をよぼうとしたものがあつたのではないだろうか。

それは文体にも表れている。奥野健男氏は読後感の中でこの作品の特徴のひとつとして、「口語会話」を挙げている。今日では時代小説、歴史小説などでも「口語会話」が用いられるのが一般的になつているが、この作品の発表当時は斬新なことであつた。永井路子氏は作者が「なま身の人間がなにを言おうとしてゐるかを、そのままずばりと伝えたかつたのだろうと思ふ」と述べている。口語体の会話は伊達騒動という史実を借りて、作者が「現代の読者に向つて、『呼びかけ訴えたい』という情熱」の表れのひとつであつたのだろう。

作者は「侍に限らない、およそ人間のいきかた」である「堪忍や辛抱」の対極に「壮烈」をおいた。

『樅ノ木は残った』の中で最も「壮烈」に描かれているのは、多くの人が正しいと思つてゐるであろうことをやろうとし、それが失敗に終わると颯爽とした遺書を残して、死んでいった伊東七十郎であろう。

兵部の手先となつて、暗殺を行った、渡辺七兵衛をやりこめたとき、道で喧嘩をふっかけた浪人を懲らしめたとき、七十郎の耳になごやかな、しかし、皮肉な微笑をうかべた甲斐の「颯爽たるも

のだな」という冷笑するような声が聞える。しかし、七十郎はその「颯爽」とした英雄ぶりで名を成した。

多田道太郎氏は作者が『英雄豪傑』の否定者であった⁽⁵⁾と言っている。確かに、作者の作品の中には「よじよう」や「ひとごろし」など、「英雄豪傑」を否定したものが少なくない。甲斐もまた、作者と同じように「英雄豪傑」の否定者だったのである。

原田甲斐には少しも英雄らしいところがない。長い間、原田甲斐は邪心によって逆上し、刃傷に及んだ人物であると信じられてきた。また、『伊達騒動実録』においても甲斐は事件が進んでからでないと前面にはでてこない。甲斐は控えめで、気が小さい人物のように描かれている。作者が甲斐に注目したのもそのような点からだったのではないだろうか。

作中の甲斐の志は伊達六十二万石を守ることであった。彼は伊達安芸、茂庭周防と秘密裡に血盟し、安芸と周防は外から兵部に対抗し、甲斐は兵部の手のうちに入って、兵部、そしてその背後にある幕府の陰謀を阻もうとする。

甲斐は始めのうちから、「私は好まない」、「私はこういうことには不向きな人間だ」、「わたしにとっては興味もなし、むしろ迷惑なくらいだ」といつづけ、山の中で自然児のように暮らすことを理想とし、「おれは間違っって生まれた」と感じている。しかし、甲斐

は自分に向いていない事柄であっても、今、自分がおかれている場所から逃れようとはしなかった。それでは甲斐が守り抜こうとしたのが、真に伊達藩六十二万石の安泰という問題だけだったのだろうか。戸石泰一氏は「甲斐が守りぬこうとしたものは『義』⁽⁶⁾というものであったのではないか。おのれの『義』とする道。」と述べて、甲斐をつき動かしたものが「義」というものであったのではないだろうか、と推測する。「義」とは、「人として当然なすべき正しい道」であり、「条理や公共のためにつくすこと」⁽⁷⁾である。そして、甲斐が選んだ「道」は決して名を成すことがない「道」であり、また、甲斐自身「名」を拒みつつけるのだ。その姿はあらゆる文学賞に推されながら、辞退しつづけた作者の姿と重なる。

そして、そういう「道」をたどるのは甲斐だけではない。甲斐の家臣塩沢丹三郎は自ら若君の毒見役を志願する。しかし、この毒見役は通常の毒見役の死が忠死であるのに対して、結果として「犬死」覚悟の役目であった。なぜなら、実際、置毒は行われ、丹三郎は死ぬが、置毒によって騒ぎが大きくなり、幕府が介入するのを防ぐため、甲斐の奔走によって食中毒として処理されるからである。丹三郎も彼自身が「義し」と思う「道」を選んだのである。彼が選んだ道も決して青史に残ることはなかった。彼もまた、耐え忍んだのである。

中黒達弥もまた、青史には残ることのない「道」を選んだ一人である。甲斐の妻律の秘事を見、その名譽のために切腹しようとした達弥を押しとどめ、酒井家でスパイをするように説得して、甲斐は言う。「侍にとって『忠死』が本望であることにまちがいはない。しかし侍の『道』のためにはときに不忠不臣の名も甘受しなければならぬ場合がある」。酒井家で家臣の一人として、平穩に暮らす同僚たちに囲まれて過ごした達弥は思う、「……それがいまはこんなに平安な生活にあこがれている、人間とは弱いものだ、あれだけの覚悟をしたにもかかわらず、僅か五年余日、安穩な暮らしをして来ただけで、そのくらしに馴れ、そのくらしを毀したくないと思うようになる、そして、正直にいつて、あの方さえいなければ」と。それでも彼は甲斐がそうしたように、自分に与えられた役目から逃げ出そうとはしなかった。彼もまた自分の置かれた立場で耐え忍び、甲斐の身の危険、伊達家の危険を察知して、身を堵して守ろうとするのだ。

一方で、おみやはおみやの気持ちに気付かず、証書を盗めと言った中黒達弥に証書を手渡しして彼をなじる。証書のことを頼んだのは「私自身のためでなく、旧主人と伊達家ぜんたいのため」であり、それは「一身を賭して護らなければならないもの」だと言う達弥に、おみやや言う、「そんなもの潰れちまうがいいわ」、「伊達家六十万

石も、あたしにはこれっぽかりの縁もありやしない、そんなもの潰されようとはらばらにされようと、あたしの知ったことじゃないわ」。そんな二人のやりとりを聞いていた新八はおみやの寝姿に語りかける。

「おまえは黒田という人を罵った。しかしあの人はなんとも思やあしない、侍というものは、自分や自分の家族よりも、仕える主君や藩のほうが大事なんだ。おまえも武家に生まれたさうだし、おれも侍だった。けれども、おれたちにはあんな生きかたはできない。あの人たちからみれば、おれやおまえは墮落した賤しい人間だろう。おれたちからみれば、あの人たちはどこかで間違っている、この世にありもしないもののために、自分や家族をいさんで不幸にしている、というように思える。つまり世界が違うんだ、そして、おれやおまえは、こっちの世界で生きるように、生まれついているんだ。

甲斐や達弥が護ろうとした「義」とは、新八やおみやから見れば、「この世にありもしないもの」であり、「自分や家族をいさんで不幸にしている」ものであった。新八やおみやや武士の家に生まれたとは言っても、いまや一般庶民である。その人たちから見れば、「政治」や「権力」の側にあつて、「ありもしないもの」のために自らを犠牲にしようとしている甲斐や達弥は「どこかで間違つて」いる

のだ。

「壮烈」を否定した甲斐、なかならず作者山本周五郎が重んじたのが「堪忍」や「辛抱」だった。周防の死後、周防の息子主水と十左衛門に真相を打ち明けて甲斐は言う、

これからも一ノ関はいろいろと手を打つことだろう、だが決して、刃向かったり、対抗してはいけない、それはかれらの思う壺にはまることだ、火を放たれたら手で揉み消そう、石を投げられたら？で受けよう、斬られたら傷の手当てをするだけ、――どんな場合にもかれらの挑戦に応じてはならない、ある限りの力で耐え忍び、耐えぬくのだ、

甲斐はこの言葉どおり、あらゆる非難を甘んじて受けた。七十郎や十左衛門が自分から離れていこうとも、主君であった綱宗に同情しようとも決して、自分の志をあかそうとはしなかった。

甲斐の家来や親しくしてきた人々が作中で、次々に死んでゆく。家臣であった丹三郎が兵部の策略の犠牲となって死んだときも、七十郎が七十郎らしく死んだときも、周防の臨終に立ち会うことを拒んだときも、新左衛門の死を目前にしたときも、甲斐の眼は決してくもらなかった。それは、彼らが、最期の最期まで「ほかに生きかたもなく、ほかに死にかたもなかった」というような死にかたをしたからではないだろうか。作者は「生」に関して次のようにも語っ

ていたという。

人間の真価は、生前なにを為したか、ではなくて、彼らが死んだとき、なにを為そうとしていたかで決まるのだ、と。ぼくもまったく同感だ。人間は死ぬまで生きるのだから、その脈を搏ち終えるまでは、自分を見限らずに努力すべきだと思う。人間にはだれにも必ず向上心があり、向日性がある。ぼくはそう信じている。自分の人生を十全に生きるように努力する。たとえ望みどおりに生きられず、失敗したり裏切られたりしても、――おそろくそんな人のほうが大多数だろうが――なお生きて努力する。それが人間にとって、もっとも大切なことだと、ぼくは思うんだがね⁽⁸⁾

甲斐が死んでいった人々に向けた眼差しは、作者周五郎の眼差しに他ならない。七十郎の死を聞き、「仮面のような顔が、額のほうから蒼ざめてゆき、こめかみがびくびくとひきつった」甲斐が、七十郎の遺書を目にし、「圧倒され、ふさがれた気持ち、風を吹きいれた」のは、その死が七十郎本人が望んだのだと実感したからである。七十郎が「七十郎らしく生き、七十郎らしく、あまりにも七十郎らしく」、「颯爽」と死んでいったからである。七十郎も周防も自身の望みを果たすことはできなかった。しかし、彼らは「十全に生きるように努力」したのだ。「七十郎の死は誤っている」と言

いながら、甲斐が彼の死に直面して、眼をくもらせなかつたのは、彼が「なお生きて努力」しようとしたからではないだろうか。

甲斐自身、死を目前にして言う。

—ただだ、死ぬのはまだだ。まだしておかなければならないことがある。死ぬのはそれからだ。

酒井家の家臣の手によって深手を負いながら、甲斐は思う。そして、この刃傷は自分の手によるものであることを駆けつけた大和守に伝えるのだ。彼もまた「十全に生き」ようとしたのだ。甲斐は「その脈を搏ち終えるまで」、「自分を見限らずに努力」し、伊達六十二万石を守ろうとしたのである。作者は、甲斐が結果的に死ぬことになった酒井邸に出向いたとき、自身の生命の危険を予期していたのだろうか、という木村久爾典氏の質問に次のように答えたという。

いや、甲斐はそこで自分が殺されるなどとは思ってもいなかっただろうな。彼は最期の最期まで、ねばりづよく精一杯に生きようとした人物だったのだから⁽⁹⁾。

自分の「義し」と思う道をねばりづよく、精一杯に生きる、これが作者が資料から読み取った原田甲斐像の一つの側面だったのではないだろうか。作品の最後に私たちが感じるのは伊達六十二万石の安泰に対する喜びであろうか。ひたすら耐え、あらゆる名を拒ん

でひとり自分の信じる道を進んできた人が、自分の「義し」とすることをやり遂げたことに對する感動ではないだろうか。

作者はあくまで「英雄豪傑」を否定している。「意地」や「面目」に縛られて、「颯爽」と死んでゆくことを肯定しなかつた。甲斐の生きた時代から第二次大戦に至るまで、日本には七十郎のような「颯爽」ぶりを好む傾向があつたように思う。潔く死んで行くこと、名を立てること、甲斐が好まなかつたこの二つが重んじられてきたのではないだろうか。一方、作者は一貫して「精一杯生きること」を訴えているように思う。ここにもこの作品を書いた作者の意図における戦後性を認めることができないだろうか。

以上のように、作者はこの作品において、「戦後」という時代の影響を大きく受けていると考えられる。つまり、この作品が「戦後」という時代の追い風を受けないで、ここまでの作品になりえたかは疑問である。そして、この作品が戦後文学の代表作のひとつであることはまちがいないと言えるのではないだろうか。

結びに代えて—歴史と作品—

『縦ノ木は残った』は伊達藩で実際に起こつた、三代藩主綱宗に對する幕府の逼塞命令が始まる十年にわたる伊達藩の寛文事件と言われる騒動を踏まえている。山本周五郎は寛文事件において、逆

臣として捉えられてきた原田甲斐の側からこの作品を描いている。山本周五郎の意図が原田甲斐逆臣説を覆すことを第一目的とすることにあったわけではないと思うが、「原田甲斐は悪人ではない」という質屋の丁稚時代からの作者自身の主張⁽¹⁰⁾からもわかるように、この作品において作者は、原田甲斐という人物をそれまでの「悪人」というイメージからは遠く隔った存在として造型している。もっとも、田辺英明「先代萩の真相」、真山青果「原田甲斐の最後」など原田甲斐を逆臣として捉えていないものもいくつか存在するが、山本周五郎自身はこの作品で原田甲斐悪人説という文学的、歴史的定説をくつがえして、なにを描こうとしたのだろうか。作者は「原田甲斐その人の『人間』と『生活』を描いてみたい」と語っている。

歴史上の出来事や人物を小説化するばあい、わたしがなにより困難を感じるのは「史的事実」のなかでどこまで普遍的な「事実」をつかみうるか、という点である。(中略) もともと「歴史」というやつは必ずしも反対証明の成り立つものだから、これは作者にとつてしばしば強い誘惑となる。しかし、それならむしろその「史的事実」からまったく離れること、つまり自分自身の創作をなすに如くはないであろう。

私はこの事件の「史的事実」を歪めたり、牽強付会したりすることをできる限り避け、その中でもっとも真実に近いものを

つかむつもりである。⁽¹¹⁾

「縦ノ木は残った」における原田甲斐の解釈でも、私は決して異説をたてようとしたのではありません。(中略) 幕府に一貫して流れていた基本政策というものは、家光以来の大藩取り潰し政策であり、酒井雅楽頭の術策におどった伊達兵部の陰謀と、反骨を好む仙台人の特異な気質とが、あの悲劇をつくりだした。兵部を除いては、忠臣も悪人も誰一人おらないのである。平凡に、安穩に生きることを願っていた原田甲斐が、その事件の渦中にまきこまれてゆきながら、なおかつ、彼が一個の人間として誠実に生きぬこうとした人生態度、その態度にわたしは惹かれたわけなんですけれども、これは、資料を忠実に読みさえすれば、自然にうかび上がってくる甲斐の人間像であるはずなのであります。⁽¹²⁾

以上のことからわかるように、作者は長い間人々に逆臣と言われ続けてきた原田甲斐を「誠実」な「一個の人間」として捉えていた。そして、作者は歴史はたしかにこのようであったと信じ、「これは、資料を忠実に読みさえすれば、自然にうかび上がってくる甲斐の人間像であるはず」と言い切っている。しかし、その一方で「歴史と小説は、一緒にならないものだと思えます。歴史は歴史、小説は小説。歴史と小説は劇然と別個のものだと思っております。」⁽¹³⁾

とも言っている。ここでいう歴史とは一般に信じられていることと
 いうような意味で使われており、続いて次のように述べている。「歴
 史というものは、統括して、そのときの政治のかたち、ないしはそ
 のときに政治を左右する権力のあり方によって、修正されたり、改
 ざんされたり、ある場合には抹殺されたり、ねつ造されたりするも
 のと思います。」そして、作者は歴史と政治との関係についてさら
 に、

歴史が、政治というものにカラまる場合には、いつでもこう
 いうふうに、真実そのものよりも、その時の社会情勢の変革を
 うらづけたり、正当づけたりするために修正され、改ざんされ、
 抹殺され、ねつ造されるといった具合であつて、(中略)―そ
 ういうものを本質的にもつていふと思つております。

…文学は、権力とか政治のあり方とは切り離して、いつでも
 人間性を追究する。―人間の生活全部をひつくるめた人間性と
 いうものを追究し、その中からなかに真実なものを見いだそう
 とする活動が根底になつていふと思つております。¹³⁾

と述べ、歴史というものがその時々々の政治というものによつて大き
 く左右されるのだと主張している。つまり、作者は『伊達騒動実
 録』に代表される甲斐逆臣説も当時の政治権力によつて造られたも
 のだと信じていたのだらう。

この作品が伊達騒動という歴史的事実を骨格として成り立って
 いることはまちがいない。ただ、この作品を支えている大部分は山
 本周五郎の創作である。この作品で重要な原田甲斐の人間像を作者
 は「これは、資料を忠実に読みさえすれば、自然にうかがひがって
 くる甲斐の人間像であるはずなものであります」と語っているが、そ
 のうかがひが上がってきた人間像を豊かにしたのは作者の力量にほか
 ならないと思うのだ。作者は「忠臣も悪臣もひとりもおらないので
 ある」と主張しているが、作中の甲斐は忠臣としてわたしたちの眼
 にうつる。それが史的にどれだけ正しいか、はっきりとはわからな
 い。しかし、作者の描きだした様々な人間像は史的事実の中から抽
 出したとは言つても、やはり、作者の創造が勝つていふだらう。原
 田甲斐という人間が立体的にわたしたちの前に現れたのは作者の
 肉付けによるものに他ならない。作品「縦ノ木は残った」を通して
 わたしたちが感じるのは原田甲斐という人物のひたすら耐え、目的
 を達すために身を犠牲にする真摯な態度である。伊達騒動の真の
 原因を幕府の雄藩取り潰し政策に求める、という見解は伊達騒動に
 対する見方のひとつであらう。しかし、原田甲斐の人物像は作者に
 よる新しい人間像の創造であり、作者のロマンである。従つて、伊
 達騒動というのはひとつの仮構的枠組みであり、作者は甲斐という
 「誠実」な「一個の人間像」にこそ普遍的なメッセージをこめたと

言ってよいだらう。

- 注
- (1) 尾崎秀樹「政治との距離」。木村久爾典『研究・山本周五郎』（昭和四十八年五月三十一日）所収。
- (2) 高橋富雄「実録・伊達騒動」『歴史への招待31』（昭和五十九年八月一日 日本放送教育出版協会）。
- (3) 永井路子「縦ノ木」の周辺。『山本周五郎全集附録第十巻』（昭和五十七年七月十二日 新潮社）所収。
- (4) (3) に同じ。
- (5) 多田道太郎「解説」。「カラー版国民の文学11山本周五郎」（昭和四十三年十月十五日 河出書房新社）。
- (6) 戸石泰一「人を愛すること―周五郎再論」。『別冊新評山本周五郎の世界（全特集）』（昭和五十二年十二月十日）所収。
- (7) 『国語辞典』（昭和六十三年八月二十五日 旺文社）。
- (8) 木村久爾典「周五郎に生き方を学ぶ」（平成七年十一月二十四日 実業之日本社）。
- (9) 木村久爾典「縦ノ木は残った」。『別冊歴史読本・作家シリーズ②山本周五郎読本』（平成十年四月二十六日 新人物往来社）所収。
- (10) 前掲書。木村「山本周五郎読本」。
- (11) (10) に同じ。
- (12) 山本周五郎『歴史と文学』。「完本山本周五郎エッセイ」（昭和四十九年十二月十日 中央大学出版）所収。
- (13) (12) に同じ。
- (14) (12) に同じ。